

通し番号	5251
------	------

分類番号	R06-9C-32-04
------	--------------

早熟性カジメとアカモクの種苗生産技術の確立と海域展開の検討	
[要約] 県内沿岸全域で魚類、貝類等の生育場である藻場が消失する磯焼けが発生し、沿岸漁業に悪影響を及ぼしている。このため、海藻種苗生産・種苗の海域展開の両面から技術開発を行った。その結果、早熟性カジメおよびアカモクの大量生産が可能となり、磯焼けした海域への移植により人工的な藻場造成が可能となった。	
神奈川県水産技術センター企画研究部	連絡先 046-882-2314

[背景・ねらい]

近年全国的に藻場が消失する磯焼けが問題となっているが、本県沿岸においても多くの藻場が消失している。このため、かつて大規模な藻場を形成していた海藻種の種苗生産技術や海域での育成技術を確認し、県内沿岸海域に藻場を再生させることを目的とした。

[成果の内容・特徴]

1 海藻種の種苗生産技術開発により、藻場造成用の早熟性カジメ、アカモクの種苗供給が可能となった。育成した種苗は県内で藻場再生に取り組む漁協・漁業者、多面的活動団体、市町村が実施する藻場造成事業に無償で提供し、県内での藻場再生を推進している。R6年はカジメ24,000株、アカモク2,000株を生産した。また、海域展開と種苗生産のタイミングを調整しながら、大型カジメ種苗を供給できるように生産体制を構築したことは大きな成果と考えられる。

2 育成した海藻種苗をそのまま海域に移植しても、環境条件や魚類等の食害により消失・枯死し、藻場再生が進まない課題に対して、場所、時期、展開方法を変えながら海藻種苗の残存、成長をモニタリングし、より残存しやすく成長が良い条件等を検討した。時期ごとにカジメの海域展開試験を実施した結果、12月中旬で水温が16～18℃で設置した種苗の成長、残存が良好であった。春～秋に設置した種苗は10月～11月に魚類（アイゴ・ブダイ）の食害により大半が消失した。アカモクの試験結果も同様に12月中旬に設置した種苗の成長・残存は良好で、1月以降に設置した種苗は、水温は12月より低く食害はあまり受けなかったものの成長は芳しくない結果であった。

[成果の活用面・留意点]

- 1 種苗生産した海藻は県内で藻場再生に使用することを前提に無償で提供し、これまで藻場再生に取り組みたくても、元となる種苗がないため直接的な海藻増殖の取り組みを出来ないという課題を解決した。今後はさらに大規模な海藻種苗生産に取り組むべく、施設の増強と大量生産における課題解決を進めていく。
- 2 海域展開の手法については、海底にロープを張り海藻畑を作る手法、漁港等の岸壁を利用した岸壁垂下型の手法、食害防除カゴ藻礁の設置、成熟した種苗を投入するスポアバッグの4つの手法により藻場再生を進めており、それぞれの手法のメリット・デメリット

ット、これまでの実施結果を漁協・漁業者等に説明し、海域ごとのより効果的な藻場再生手法を提案する。魚類の食害を完全に防除することは不可能であるので、今後は食害魚が近づきづらい場所、海藻が食害魚に見つかりづらい場所等の条件を比較し、より効果的な手法の技術開発を進める。

[具体的データ]



図1：生産した早熟性カジメ大型株（左）およびアカモク株（右）



図2：育成した種苗の海域展開  
(左：岸壁垂下して成長したカジメ、右：海底敷設して成長したアカモク)

[資料名] 水産技術センター業務報告  
[研究課題名] 藻場再生技術高度化試験  
[研究期間] 2022年～2024年  
[研究者担当名] 高村正造、遠藤健斗  
[協力・分担関係]